

# 文学と歴史と音楽と

—『徒然草』を中心に—

2021年2月27日（土）14：50～16：20

磯 水 絵

# 本日のテーマ：『徒然草』の読み方

- ・新しい時代、新しい注釈。参考書の呪縛からの解放
- ・章段なんて気にしないで！
- ・前後のページ・次の行を気にしよう。やっぱり、アナログ！
- ・史実と説話
- ・兼好は月が好き、 月を好きな人が好き、 月に想う文化的下地
- ・兼好を『徒然草』だけで見てはいけない
- ・兼好と音楽：階層は暴露される
- ・歴史は前から読むべき
- ・経験が想像力を裏打ちする
- ・厳密な史料主義、用例主義。
- ・千本釈迦堂：兼好自讃の段、238段。

# 新しい時代、新しい注釈

——第一に御学問、第二に管絃——

## 『徒然草』 第一段末

ありたき事は、まことしき文の道、作文・和歌・**管絃**の道、又有職に、公事の方、人の鏡ならんこそいみじかるべけれ。手などつたなからず走りがき、**声をかしくて拍子とり**、いたましうするものから、下戸ならぬこそ男はよけれ。

(新編日本古典文学全集本)

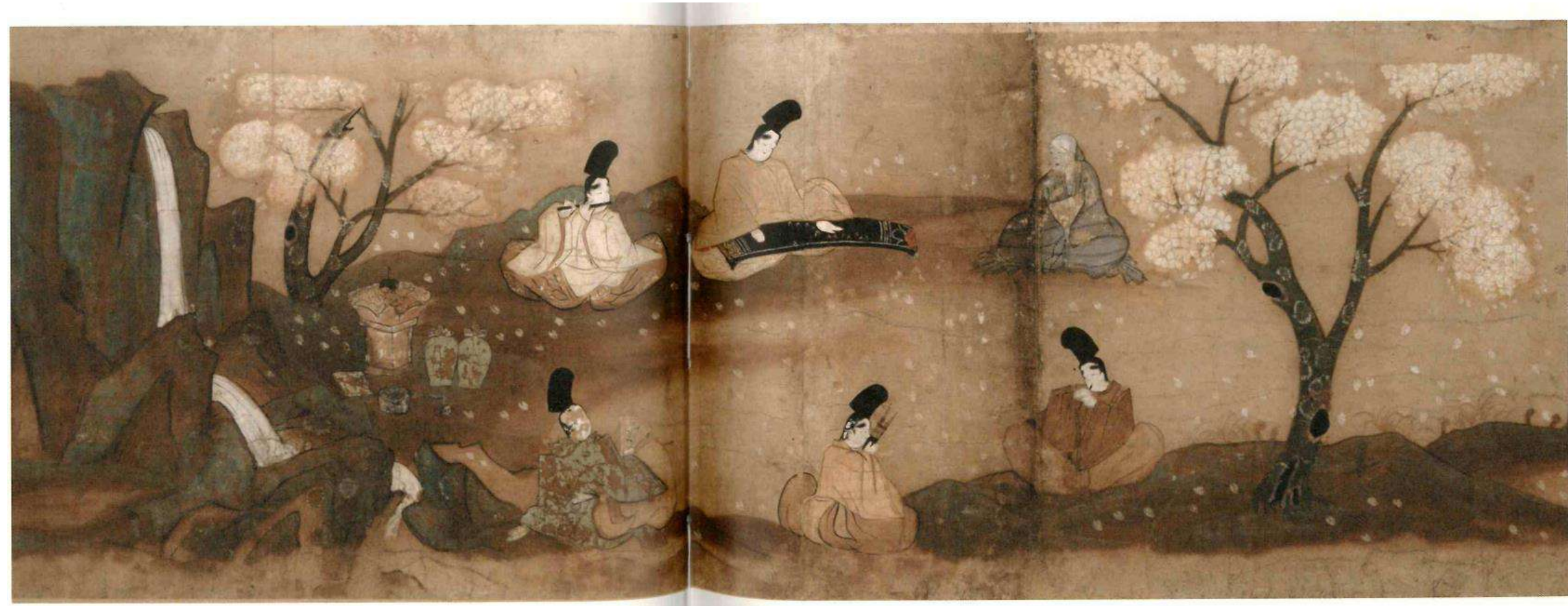
(一一九七～一二四二年)

## 順徳院『禁秘鈔』上

### 「一 諸芸能事

第一に御学問なり、**第二に管絃**」





# 『源氏物語絵巻』 若紫

(『続日本絵巻大成18』より)

《詩歌管絃——三勅撰集の成立——》

作文…凌雲（新）集……八一四年

和歌…古今和歌集……九〇五年

管絃…新撰横笛譜……九二一年

管絃 ○  
管弦 ×  
糸竹 = 絃管

糸Ⅱ絃樂器（琵琶・箏・和琴）

竹Ⅱ管樂器（笙・笛・篳篥）

声をかしくて拍子とり Ⅱ 御遊び（御遊）

御遊び……宮中や院の御所で、天皇や貴人が催す遊び。詩歌会を指すこともあるが、単に「御遊」といえば、「管絃の御遊」を指す。

【例（後宇多天皇朝・一二七五年）】

建治元年12月22日 任内大臣御遊

（権大納言藤原家基15が内大臣に任じられての御遊）

拍子 藤公守 （洞院権中納言従二位 27）

笙 藤盛家朝臣 （右兵衛佐正四位下？）

笛 藤経良 （二条参議正三位 26）

箏 藤兼行朝臣 （左少将従四位下 22）

琵琶 藤範藤朝臣 （元左中将従四位上？）

箏 尊者藤兼忠 （鷹司権大納言正二位 14）

和琴 藤康能朝臣 （元中将正四位下？）

付歌 記載ナシ



# 雅楽の演奏と楽器

雅楽の演奏には、三拍子がある。  
器楽の演奏を楽しむ時、管弦と  
器楽の演奏に合わせて舞われる舞を楽しむ舞楽である。  
皇室の行事や公開演奏会等  
宮内庁楽部によって演奏されるほか、  
四天王寺をはじめ全国の社寺の祭礼で  
舞楽が奉納される。  
雅楽は平安時代に整えられた様式を今日に伝え、  
楽器も古式を伝える独特のものである。

三ノ鼓 (さんのつづみ)



◎—三ノ鼓

鞆鼓 (かっこ)



◎—鞆鼓

箏 (そう)



↑ 横笛 (よこぶえ)



↑ 篳篥 (ひちりき)



◎—篳篥・宮箏



◎—雅楽の琵琶・箏

→ 琵琶 (びわ)



→ 笏拍子 (しゃくびょうし)



◎—笏拍子

◎—雅楽の箏

← 笙 (しょう)



◎—笙

← 鉦鼓 (しょうこ)



◎—鉦鼓

← 大太鼓 (だだいこ)



◎—大太鼓(だだいこ)(左方)

← 釣太鼓 (つりだいこ)



◎—釣太鼓



『住吉物語絵巻』断簡  
(『続日本絵巻大成18』より)





【参考】

自正中二年(一三二五)至建武元無大饗。(一三三四)建武三年改有

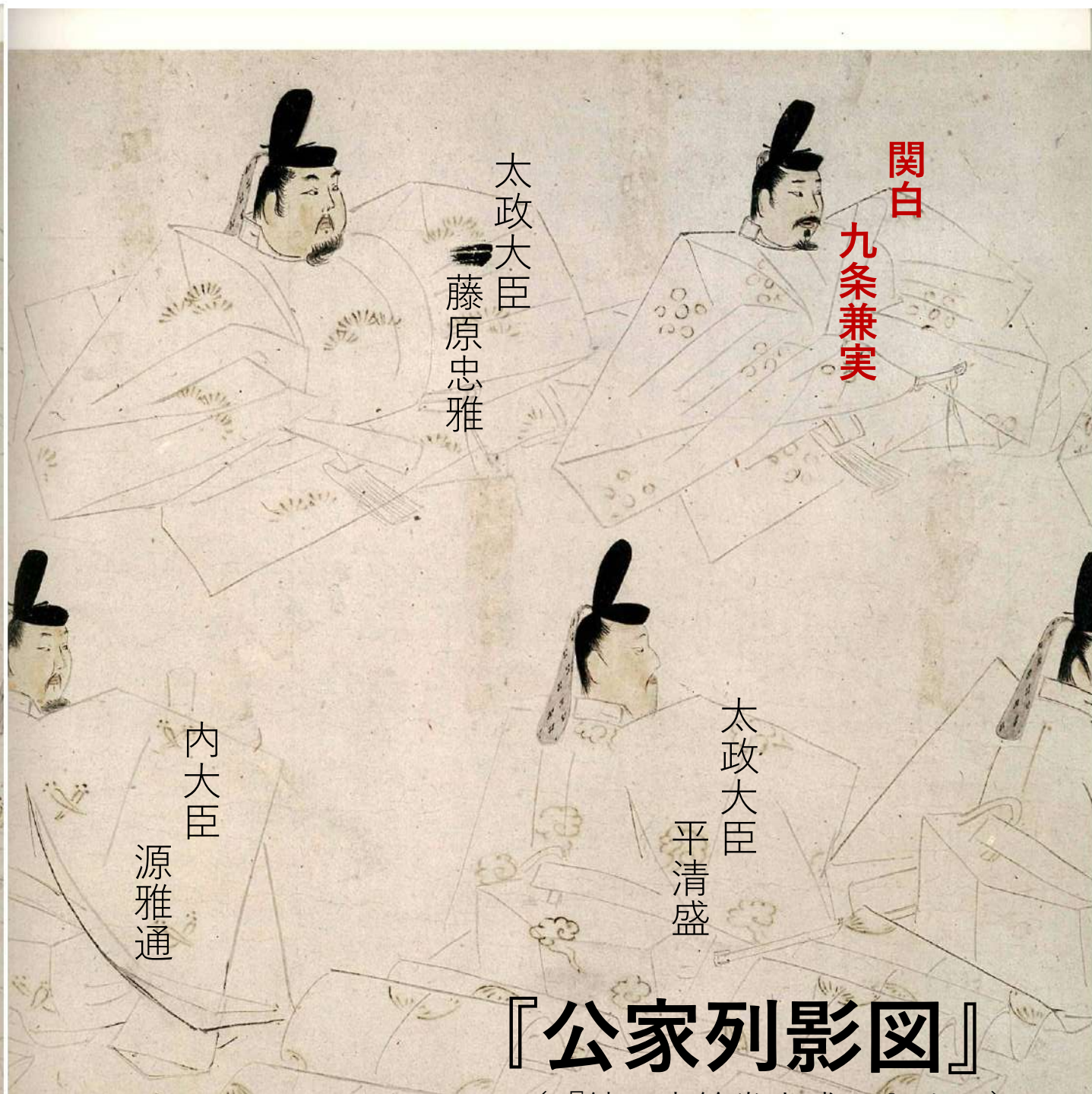
内大臣饗。無御遊。自建武三至永德元年(一三八一)四月

十六日。絶而無饗。今（永德元）年再興。

呂……穴貴・鳥破・席田・鳥急・胡飲酒破。  
律……伊勢海・万歳樂・五常樂急

（参考資料『御遊抄』『公卿補任』）









# 『天子摂関御影』

（『続日本絵巻大成18』より）





# 『天子摂関御影』

(『続日本絵巻大成18』より)



# 『天子摂関御影』

(『続日本絵巻大成18』より)



太政大臣 藤原宗輔 (86歳)

太政大臣 藤原伊通 (73歳)

内大臣 藤原公教 (58歳)



右大臣 藤原公能 (47歳)

内大臣 藤原宗能 (86歳)



太政大臣  
藤原師長

竹長云



# 『天子摂関御影』

（『続日本絵巻大成18』より）



太政大臣 大炊御門信綱 (76歳)

太政大臣 西園寺実兼 (74歳)



太政大臣 堀河基具 (66歳)

内大臣 久我通基 (69歳)



内大臣 三条実重 (70歳)



太政大臣 徳大寺公孝 (53歳)

太政大臣 土御門定実 (66歳)

太政大臣 關院公守 (69歳)



## 《清少納言の篳篥と兼好の篳篥》

### 『徒然草』第一六段

神樂こそなまめかしく、おもしろけれ。

おほかた、ものの音には、笛・篳篥、常に聞きたきは、琵琶・和琴。

### 『枕草子』二〇五段後半

篳篥はいとかしがましく、秋の虫をいはば、轡虫などの心地して、うたてけ近く聞かまほしからず。ましてわろく吹きたるは、いとにくきに…………。

### 『源氏物語』「末摘花」

物の音ども、常よりも耳かしがましくて、方々いどみつつ、例の遊びならず、大篳篥、尺八の笛などの大声を吹き上げつつ…………。

＊清少納言の聞いていた篳篥は大きく、音が四度低かった可能性がある。

章段なんて気にしないで

——「見ぬ世の人を友とするぞ、

こよなう慰むわざなる。」——

## 第一三段（漢詩文）

文選・白氏文集・老子・莊子

## 第一四段（和歌）

梁塵秘抄の郢曲の言葉こそ、又あはれなる事は多かめれ。

## 第一五段（旅）

能ある人、かたちよき人も、常よりはをかしとこそ見ゆれ。

寺・社などに忍びてこもりたるもをかし。



## 第一六段（管絃）

神樂こそなまめかしく、おもしろけれ。  
おほかた、ものの音には、笛・箏・篳篥、常  
に聞きたきは、琵琶・和琴。

## 第一七段（第一五段の終止段）

山寺にかきこもりて、仏につかうまつる  
こそ、つれづれもなく、心の濁りも清まる  
心地すれ。

# 《鬼の話——その姿——》

## 第五〇段

応長の比、伊勢国より、女の鬼になりたるを率てのぼりたりといふ事ありて、その比廿日ばかり、日ごとに、京・白川の人、鬼見にとて出で惑ふ。「昨日は西園寺に参りたりし」、「今日は院へ参るべし」、「ただ今は、そこそこに」など言ひ合へり。まさしく見たりと言ふ人もなく、そらごとと言ふ人もなし。上下ただ、鬼の事のみ言ひやまず。

### （中略）

その比、おしなべて、二三日人のわづらふ事侍りしをぞ、「かの鬼のそらごととは、このしるしを示すなりけり」と言ふ人も侍りし。



## 前後の頁・次の行を気にしよう

——『明月記』の「猫股」——

### 第八九段

「奥山に、猫またといふものありて、人を食ふなる」と、人の言ひけるに、「山ならねども、これらにも、猫の経あがりて、猫またに成りて、人とする事はあなるものを」と言ふ者ありけるを……

＊鬼はいつから姿を現したか？

新編日本古典文学全集本頭注「猫また」

「当時南都ニ云フ。猫股ノ獣出デ来リ、一夜ニ七八人噉ラフ、死スル者シ。……日ハ猫ノ如ク、其ノ体ハ犬ノ長ノ如シト」（明月記）。伝説的な怪獣。

（一二三三）

『明月記』天福元年八月小二日条

夜前自南京方来使者小童云、当時南都云猫股獣出来、一夜噉七八人、死者多、或又打殺件獣、目如猫、其躰如犬長云々、二条院御時、京中此鬼来由、雜人又称猫股病、諸人病悩之由、少年之時人語之、若及京中者、極可怖事歟、

## 史実と説話

——『大日本史』の落とし穴——

『続古事談』第一「王道后宮」第二十五話

此世ヲハ我ヨトソ思モチ月ノ

カケタル事モナシト思ヘハ

「『小右記』に見る説話の一原形」

『二松学舎大学人文論叢』第六輯 一九七四年

寛仁二年一〇月一六日……

道長、この日、三后の父となる。

一条 天皇中宮太皇太后彰子

三条 天皇中宮皇太后妍子

後一条天皇中宮威子

＊前後のページ……その日の穩座の記録

小野宮実資『小右記』

又云、誇たる歌になむ有る、但非宿構者、  
此世乎は我夜とそ思望月乃□たる事も無と  
思へハ

藤原道長『御堂関白記』

於此余読和歌、人々詠之、



## 歴史は前から読むべき

- ・貴志正造先生に18歳で出会い、翌年、中世文学ゼミナールに入り、『宇治拾遺物語』に出会う。  
#3年次は『尊卑分脈』と『公卿補任』を調べるのが日課。

『続古事談』に22歳で出会う。

「この世をば」で「道長像」が造形された。

元凶は『大日本史』列伝部。

- ・歴史と文学を意識する。

- ・鴨長明『方丈記』『発心集』

「秘曲尽くし」から音楽説話へ

『文机談』注釈が修士二年間の営み

- ・福島和夫先生に25歳で出会う。

- ・第二研究室・上野学園大学日本音楽史研究所

- ・ブルデュー『ディスタンクシオン』

(Eテレ「二〇〇分de名著」より)

### 偶然神話の否定

階層は暴露される

目とは歴史の産物

文化的下地

文化的能力の遺産

教師は文化に携わるもの

出身階級・家庭環境・教育

## 兼好は月が好き（1）

——『徒然草』の章段区別——

【参考】鴨長明の没年資料『月講式』

＊『徒然草』に、章段の区別はなかった。  
自分なりにブレス記号を入れてみよう。

### 第一九段冬

すさまじきものにして見る人もなき月の、  
寒けく澄める廿日あまりの空こそ、心ぼそ  
きものなれ。

### 第二〇段

なにがしとかや言ひし世捨人の、「この  
世のほだし持たらぬ身に、ただ空の名残の  
みぞ惜しき」と言ひしこそ、誠にさも覚え  
ぬべけれ。

### 第二一段

よろづのことは、月見るにこそ慰むもの  
なれ。ある人の、「月ばかり面白きものは  
あらじ」と言ひしに、又ひとり、「露こそ  
あはれなれ」と争ひしこそをかしけれ。折  
にふれば、何かはあはれならざらん。



## 兼好は月が好き（2）

——月を好きな人が好き——

### 第三段

九月廿日の比、ある人に誘はれ奉りて、  
明くるまで月見歩く事侍りしに（中略）、よ  
きほどに出で給ひぬれど（中略）、妻戸をい  
ま少しおしあけて、月見る気色なり。

### 第四三段

春の暮つかた、のどやかに艶なる空に、  
いやしからぬ家の（中略）、見過しがたきを、  
さし入りて見れば（中略）、かたちきよげな  
る男の、年廿ばかりにて……

### 第四四段

あやしの竹の編戸のうちより、いと若き  
男の、月影に色あひさだかならねど、つや  
やかなる狩衣に、濃き指貫、いとゆゑづき  
たるさまにて、ささやかなる童ひとりを具  
して、遙かなる田の中の細道を、稲葉の露  
にそぼちつつ分け行くほど、笛をえならず  
吹きすさびたる……

## 月に想う文化的下地

### 第一三七段

花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものかは。雨にむかひて月を恋ひ（中略）。花の散り、月の傾くを慕ふ習ひは、さる事なれど（後略）。

### 第二一二段

秋の月は、かぎりなくめでたきものなり。いつとても月はかくこそあれとて、思ひ分かざらん人は、無下に心憂かるべき事なり。

### 第二三九段

八月十五日、九月一三日は、婁宿なり。この宿、清明なる故に、月を翫ぶに良夜とす。

### 第二四一段

望月のまどかなる事は、暫くも住せず、やがて欠けぬ。

如幻の生の中に、何事をかなさん。すべて所願皆妄想なり。所願心に来たらば、妄心迷乱すと知りて、一事をもなすべからず。直ちに万事を放下して道に向ふ時、さはりなく、所作なくて、心身永くしづかなり。



兼好を『徒然草』だけで見てはいけない

——『兼好自撰家集』より——

七月七日月のかたぶくを

6 あまの川みおゆく月はながるとも

あふせにかけよくものしがらみ

無動寺にてなつの夜あくるまで月を見て

8 とりのねのきこえぬ山のかひもなし

さてもあけゆくみじかよの月

ふかくさにかよひしころあか月きぬた

うつを

11 ころもうつよさむの袖やしぼるらん

あか月露のふかくさのさと

をぐらの宮のすみ給けるところといふ堂にとまりてありあけの月おもしろきあけぼのいろ／＼の花ををりて仏にたてまつるとて月のこり露むすばんあしたまがきの花ををりて仏界に供せむとかかれたるをおもひいでて

18 むかしおもふまがきの花を露ながら

たをりていまもたむけつるかな

八月十五夜報恩寺にて人くあまた哥よむ  
よしきき侍しをわづらふことありてえまか  
らで申つかはし侍し

28

月にうき身をあきぎりのへだてにも

さはらでかよふ心とをしれ

32

冬の夜あれたる所のすのこにしりかけて木  
だかき松のこのまよりくまなくもりたる月  
を見てあか月まで物がたりし侍ける人に  
おもひいづやのきのしのぶに霜さえて

松の葉わけの月を見し夜は

73

こよろぎのいそといふところにて月を見て  
こよろぎのいそよりとをくひくしほに

うかべる月はおきにいでにけり

むさしのくにかねさわといふところにむか  
しすみし家のいたうあれたるにとまりて月  
あかき夜

74

ふるさとのあさぢがにはのつゆのうへに

とこはくさ葉とやどる月かな



長明と兼好（1）

——ますほの薄——

『無名抄』16 ますほの薄の事

雨の降りける日、或人のもとに、おもふ  
どちさしあつまりて、ふるき事など、かた  
り出でたりけるついでに、「ますほのすす  
きといふは、いかなるすすきぞ。」など、  
云ひしろふほどに、ある老人のいはく、「わ  
たのべといふ所にこそ、このことしりたる  
ひじりひとりあるときき侍りしかども、い  
まだ尋ねきかず。」といひ出でたりけり。  
登蓮法師その中にありて、この事をきき、  
詞ずくなになりて、又とふこともなく、あ  
るじにいふ様、「みのかさちとかしたまへ。」  
といひければ、あやしと思ひながら、とり  
いでたり（後略）。

## 長明と兼好（2）

——ますほの薄——

### 『徒然草』第百八十八段後半

一事を必ず成さんと思はば、他の事の破るるをもいたむべからず。人の嘲りをも恥づべからず。万事にかへずしては、一の大事成るべからず。人の数多ありける中にて、ある者、「ますほの薄、まそほの薄などいふ事あり。わたのべの聖、この事を伝へ知りたり」と語りけるを、登蓮法師、その座に侍りけるが聞きて、雨の降りけるに、「蓑笠やある、貸し給へ。かの薄の事習ひに、わたのべの聖のがり尋ねまからん」と言ひけるを、「あまりにも物騒がし。雨やみてこそ」と人の言ひければ、「無下のことをも仰せらるるものかな。人の命は、雨の晴れ間をも待つものかは。我も死に、聖も失せなば、尋ね聞きてんや」とて、走り出でて行きつつ、習ひ侍りにけりと申し伝へたるこそ、ゆゆしくありがたう覚ゆれ。「敏きときは則ち功あり」とぞ、論語と言ふ文にも侍るなる。この薄をいぶかしく思ひけるやうに、「一大事の因縁をぞ思ふべかりける。」



# 兼好と音楽

——階層は暴露される——

## 『徒然草』 第十六段

神楽こそなまめかしく、おもしろけれ。

## 第一七八段

或所の侍ども、内侍所の御神楽を見て、人に語るとて、「宝剣をばその人ぞ持ち給ひつる」などいふを聞きて、内なる女房の中に、「別殿の行幸には、昼御座の御剣にてこそあれ」と、しのびやかに言ひたりし、心にくかりき。その人、古き典侍なりけるとかや。

## 第七〇段

元応の清暑堂の御遊に、玄上は失せにし比、菊亭大臣、牧馬を弾じ給ひけるに、座に著きて、先づ柱をさぐられたりければ、ひとつ落ちにけり。御懷にそくひを持ち給ひたるにて、付けられにければ、神供の参るほどによく干て、ことゆゑなかりけり。いかなる意趣かありけん、物見ける衣被の、寄りて放ちて、もとのやうに置きたりけるとぞ。

## 第一二二段末

この外の事ども、多能は君子の恥づる処なり。詩歌にたくみに、糸竹に妙なるは幽玄の道、君臣これを重くすといへども、今の世にはこれをもちて世を治むる事、漸くおろかなるに似たり。金はすぐれたれども、鉄の益多きにしかざるがごとし。

# 私が歌わない理由

## 第一八七段前半

よろづの道の人、たとひ不堪なりといへども、堪能の非家の人にならぶ時、必ず勝る事は、たゆみなく慎みて軽々しくせぬと、ひとへに自由なるとの等しからぬなり。

## 第一九一段

「夜に入りて物のはえなし」といふ人、いと口惜し（中略）。匂ひも、ものの音も、ただ夜ぞ、ひときはめでたき。

## 第一九九段

横川行宣法印が申し侍りしは、「唐土は呂の国なり。律の音なし。和国は単律の国にて、呂の音なし」と申しき。

## 第一一十四段……想夫恋・廻忽の故実

## 第二一九話……豊原竜秋と大神景茂の管楽器の説

「上手はいづれをも吹きあはす。呂律のものにかなはざるは、人の咎なり。器の失にあらず」と申しき。

## 第二二〇段……鐘の声は黄鐘調

## 第二十五段……白拍子の根元

## 第二二六段……平曲成立の記録

## 第二二七、八段……声明の起源

## 第二三二段……琵琶法師の物語

柱の逸話←第七十話



# 公世の二位は兼好の友

## 第四五段

公世の二位のせうとに、良覚僧正と聞えしは、極て腹あしき人なりけり。坊の傍に、大きな榎の木ありければ、人、「榎木僧正」とぞ言ひける。この名然るべからずとて、かの木をきられにけり。その根のありければ、「きりくひの僧正」と言ひけり。いよいよ腹立ちて、きりくひを掘り捨てたりければ、その跡大きな堀にてありければ、「堀池僧正」とぞ言ひける。

※公世の二位…従二位侍従藤原公世。歌人。文暦二年（一二三五）、侍従。正安三年（一二三〇）没。

## 『兼好自撰家集』（一二九七年）

堂のはしらに永仁五年公世の二位五部大乘経くやうにのぼりて筆ひきけるよしなどかきて

63 ひくことをあはれとしらばなき

世までかたみにしたへ松の秋風

とかきつけられたるがきりにくちのこりてかすかに見ゆるもあはれにてかたはらに

64 松かぜをたえぬかたみときくからに

むかしのことのねこそなかるれ

## 管絃者としての藤原公世考（1）

『徒然草全注釈』 上巻二一六ページ

注釈より…永仁元年（一二九三）九月に従二位に叙せられてから、正安三年（一二三〇）四月六日に薨ずるまで、長く散位であつたがために、かく称せられたのである。

『兼好法師家集』の先の贈答から、兼好が、公世の箏の名手たることを熟知し、関心を持っていたことが知られる。

【楽書を使おう】

『糸竹口伝』

・彼若御前ノ流ヲバ三位実俊ツタハラレタリ。其子中将公世。御賀ノ時スミ申サレシカドモ御承引ナカリキ。今ハ絶タルニヤ。

『秦箏相承血脈』

白河尼

参議公清男

・若御前尼―内大臣公教女―従三位実俊

号今五辻

御前

母大納言資賢女

―従二位公世―後深草院他



## 管絃者としての藤原公世考（2）

### 『御遊抄』

・正嘉元十一廿六。任内大臣。実雄。尊者通雅。  
箏。公世朝臣。（従四位上）

・弘長元三廿七。任内大臣。公親。尊者権大雅忠。  
箏。公世朝臣。（正四位下左馬頭）

・文永二十五。任内大臣。左大将冬忠。尊者師繼。  
箏。公世朝臣。（左中將）

・同八三廿七。任内大臣。師繼。尊者権大長雅。  
箏。公世朝臣。（前左中將）

・建治二八十五。（臨時御会）  
箏。（公世朝臣／公行朝臣）

・正応三六八。任内大臣。信嗣。尊者実泰卿。  
箏。侍従三位公世。

二松学園大学 学術叢書

# 興福寺に 鳴り響いた音楽

― 教訓抄の世界 ―

磯 水絵 編 Ito Mizue



思文閣出版

(思文閣出版 二〇二一年三月一九日刊行)

- 第一編 興福寺の音楽文化と伯氏
- 第二編 伯近真『教訓抄』の世界
- 第三編 興福寺の音楽文化、その後

執筆者 (掲載順)

磯 水絵 (本学教授)

塩沢 一平 (本学教授)

櫻井 利佳

(上野学園大学日本音楽史研究所講師)

神田 邦彦 (花園大学講師)

五月女肇志 (本学教授)

根本 千聡 (法政大学大学院生)

落合 愛董 (本学大学院生)

中安 真理 (同志社大学助教授)

鈴木 和大 (本学大学院生)

中川 桂 (本学教授)

高橋 美都 (同志社大学嘱託講師)



それではみなさん  
ごきげんよう！

